

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 23 年 5 月 30 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520400

研究課題名（和文） アジア諸言語における他動性と非規範的構文に関する記述的・理論的・実証的研究

研究課題名（英文） A descriptive, theoretical and experimental study of transitivity and non-canonical constructions in Asian languages

研究代表者

鄭 聖汝（CHUNG SUNGYEO）

大阪大学・文学研究科・講師

研究者番号：60362638

研究成果の概要（和文）：主に日本語・韓国語・マラーティー語を取り上げ、他動性の観点から非典型的な出来事と言語形式との相関を考察し、記述と理論と実証の3方面から言語間の共通点・相違点を明らかにした。また規範的な構文と非規範的な構文の関係を統一的にとらえられる記述枠組みも提案した。これらの成果は国内外の諸学会および研究会で発表し、また科研研究成果報告書（冊子体）に収め公開した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we explored both the similarities and differences between the languages of Asia from the three perspectives: descriptive, theoretical, and experimental. Considering mainly Japanese, Korean and Marathi, we investigated correlations of mean/ functions of non-prototypical events and linguistic forms used for encoding them from the viewpoint of transitivity. Based on our research we proposed a unified framework to describe the relation between canonical and non-canonical constructions. The results of our research have been presented at numerous conferences in Japan and abroad and are put together in the form of a *Kaken Result Report* for wider dissemination.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：他動性、意図性・非意図性、心理学的実験、非規範的構文、記述枠組み、日本語、韓国語、マラーティー語

1. 研究開始当初の背景

(1) 理論と実証の観点

Hopper & Thompson(1980)（以下 H&TH と略す）以来、他動性の問題は主としてプロトタイプ理論の観点から研究がすすめられており、本研究も基本的にはその流れに沿って

る。本研究が注目したのは、H&TH が提案した 10 のパラメータ（意味要素）と他動性の相関であり、その中でも特に意図性・非意図性にかかわる問題である。H&TH によれば、参加者が二人以上であり意図性が高い状況は他動性が高い状況を表すため、その言語的コー

ド化は他動詞文として実現され、そうでなければ自動詞文として実現されることを予測する。ところが、実際の言語現象を見てみると、日本語や英語、韓国語など多くの言語では非意図的な出来事も他動詞文にコード化される状況が見られる(例: 太郎が足を折った)。そこで、非意図的な出来事はなぜ他動詞文としてのコード化を許すのか、という問題が提起され、その動機づけについて説明が求められていたのである。これについて、Ikegami (1982) をはじめとする国内外の多くの研究では、その動機付けを「責任」概念に求め、説明を与えている。しかし、多数の支持を得てはいるものの、この仮説は実証的に検証されたわけではない。

このような背景から、本研究では意図的な出来事と他動詞文という典型的な相関のパターン以外にも、非意図的な出来事と他動詞文の非典型的な相関のパターンも許されることを認め、心理学的実験手法を用いて、実証的にこれらの相関関係およびその動機づけを探ることにした。

その一方で、インド・アリア諸語では日本語や韓国語と異なり、上記のような非意図的な他動詞文は自動詞文としてしか表現できないことが報告されている。すると、その背後には言語の典型的な特徴が関与する可能性も示唆され、言語間の相違を考慮しなければならないことがわかる。そこで、本研究では東アジア言語の日本語・韓国語と南アジア言語のマラーティー語を対照し、言語類型論的にも資する研究を目指すことに着手した。

(2) 記述と理論の観点

本研究が対象とする構文は、他動性のプロトタイプから逸脱した次の五つの構文である。①非意図的事象の他動詞構文、②無生物主語の他動詞構文(例: キウイはビタミンCをたくさん含んでいる)、③与格主語構文・二重主格構文(例: 金氏に/がお金が必要)、④動作主を含意する自動詞構文(例: 最近ビルがたくさん建ちましたね)、⑤被使役者を含意する他動詞構文(例: 秀吉が大坂城を建てた)。これらの五構文は他動性の何らかのレベルにおいて典型的な構文と異なる。本研究ではこの五構文を非規範的構文と定義し、典型的なパターンを示す規範的構文と区別する。

国内外の研究動向を見渡すと、非規範的な構文に関しては大きく四つの研究の流れが見られる。しかし、それぞれ独立に研究が行われ、全体を統一的に捉えられる状況には至っていない。まず、①の構文に関しては、上述のように Ikegami (1982) をはじめとする多くの先行研究があり、そこでは非意図的な出来事が他動詞文に言語化される理由を「責任」概念に求めている。しかし、それが意味

論上の概念なのか語用論上の概念なのか明らかでない。次に、③に関しては Kuno (1973) から始まり、約 30 年以上にわたる長い議論がある。そこでは主として与格主語構文・二重主格構文を他動詞文とみるか自動詞文とみるかという自他問題に焦点が当たっている。⑤の構文に関しては、間接的な使役状況が他動詞文に言語化されることが問題とされるが、Ikegami (1982) ではその理由をオーソリティーの概念に求めている。その後、統語的な観点から意味上の参加者の数と項構造の不一致が指摘されるようになるが、この場合、参加者(項)の抑制とオーソリティーの概念の間の関係が必ずしも明らかでない。さらに④の構文との類似性も見逃しているという不都合も生じている。最後に、日英語の対照から提唱された「状況中心」対「人間中心」と DO-language 対 BECOME-language、HAVE-language 対 BE-language の類型もある。そこでは④または①の自動詞表現と他動詞表現の言語的選択の傾向、あるいは所有概念の言語化に見られる選択が問題となる。

このように他動性にまつわる現象がそれぞれ独立に議論されている状況があり、この四つの研究の流れを統合し、さらに規範的構文との関係も包括的にとらえられる記述枠組みの開発が要求されることがわかる。そこで本研究では、70年代 Rosch らによって提案された家族的類似性を基盤にしたプロトタイプ理論を導入すれば、他動性にまつわる構文全体を統一的に記述できると発想した。

[文献]

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56: 251-299.

Ikegami, Yoshihiko (1982) Indirect Causation and De-agentivization: The Semantics of Involvement in English and Japanese. *Proceedings of the Department of Foreign Languages and Literature, College of Arts and Science* 29-3: 95-112. Tokyo: University of Tokyo.

Kuno, Susumu (1973) *The structure of the Japanese language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

2. 研究の目的

本研究では、他動性の分野においてこれまであまり包括的・統一的に研究されてこなかった非典型的な出来事と非規範的構文(non-canonical construction)の関係に焦点を当て、東アジア言語(日本語と韓国語)と南アジア言語(マラーティー語)の対照研究を行う。目的は以下の通りである。(1) 他動性のプロトタイプから逸脱した非典型的な出来事の言語表現化において、言語間に見られる類似性・個別性の詳細を記述する。(2)

非典型的な出来事の言語表現化の背後にあるとされる認知的メカニズム（例えば、「私は財布をなくした」のような非意図的な出来事は、言語化においては自動詞表現も選択可能であるが、このような状況において他動詞表現を選ぶ際に解釈される、主語の事態回避の失敗に対する「責任」や「回避可能性」など）の心理的な実在性を実験的手法によって実証する。(3) 他動性と言語構造の対応関係を統一的に記述できる枠組みの開発および理論構築を目指す。それによって、他動性と言語構造の相関関係を解明し、言語理論の構築に貢献すると共に、言語表現化に見られる日本語・韓国語・マラーティー語の共通点と相違点を明らかにし、言語類型論にも寄与することを旨とする。

3. 研究の方法

本研究の特徴は、すでに表現された言語資源（書き言葉、コーパスなど）の利用だけにとどまらず、実際の言語使用の場面において、母語話者がどのように言語表現を選択するかという、刺激とその産出（言語表現）との関係にも焦点を当てたことである。前者の言語資源の利用は、当該の言語に見られる表現の分布を調べるために有効な方法であるが、後者はインプットした意味（状況）とそのアウトプットの言語表現との相関を調べるために必要な方法であると考えられる。

本研究では、後者の調査を行うに当たって次の二種類の実験を用意した。一つは、ビデオ映像による実験であり、もう一つは質問紙調査による実験である。ビデオ映像による実験では、言語的刺激は与えず、他動性の高い意図的な出来事と、他動性の低い非意図的な出来事を日本語・韓国語・マラーティー語の母語話者にそれぞれ見せ、その内容を自由記述してもらうという方法をとった。一方、質問紙調査では、デフォルトの言語刺激（自動詞文）を与え、どれぐらい他動詞文の使用がみられるかを調査した。またその際に、意識レベルの調査も行い、「責任」意識や「回避可能性」に関するアンケート調査も行った。これらの実験調査は2009年度から2010年度の2年間にわたり、日本（大阪大学、北海道大学、藤女子大学、岐阜大学）、韓国（群山大学、全北大学、嶺南大学）、インド（Pune University）で行われた。映像実験では、日本語母語話者108名、韓国語母語話者107名、マラーティー語話者135名、合計135名からデータをとることができた。質問紙実験では非意図的な出来事に関する言語使用の場面を12場面設定し、原因別条件（不注意、うっかり、地震）を組み合わせた調査を行った。実験結果はそれぞれ統計処理され、言語間の相違や傾向を統計的にとらえることができた。

4. 研究成果

記述的・理論的研究に関しては、まず家族的類似性を基盤にしたプロトタイプ理論の観点から記述枠組みを提案し、そのケース・スタディーとして韓国語と日本語を記述したことによって、この枠組みの有効性を実証した（下記の[雑誌論文]の③⑤⑥）。またマラーティー語に関する記述（下記の[雑誌論文]の④）や、「日本語における非意図的他動詞文の歴史的变化」についても調査報告ができた（これは藤本真理子氏の協力を得ている。下記の[図書]①に収録）。

次に理論的・実証的研究に関する成果発表は、実験調査が終了した2010年度後半からスタートできた。日本語文法学会第11回パネルセッションでの発表を皮切りに、雑誌論文3編、予稿集論文3編、報告書論文2編（下記の図書①に収録）と、学会発表6本、その他2本の発表が行われた。その中で質問紙実験（アンケート調査）による成果はまだ1編しかなく、今後も継続して分析を行い、成果を上げていく予定である。映像による実験の成果は、内容別にみると、まずプロトタイプ理論に関する検証が行われ、全体的な傾向としては概ねプロトタイプ理論が予測する通りの結果が見られた。つまり、3言語とも意図的な出来事に他動詞文を用いて表現する傾向がみられ、特にマラーティー語では非意図的な出来事を他動詞文で表現する話者はほぼ0%であることが確認された。ところが、結果事象に焦点を当てた場合は、プロトタイプ理論が予測する状況と異なる結果が得られた。日本語と韓国語は意図的な出来事でも結果事象を自動詞で表現する傾向が顕著にみられた。一方、マラーティー語はむしろ他動詞が多く使用される。このような結果は、今後類型論的な観点（スル型言語とナル型言語）の導入も必要であることを物語っているものとして受け止められる。今後の課題である。

以上のように、記述・理論・実証の三方面から追究したことにより、他動性と非規範的構文の関係をより包括的・総合的に捉えることができた。その成果として、①新しい記述枠組みが提案でき、②言語間の共通点・相違点が明らかになったこと以外にも、③他動性のプロトタイプ理論に矛盾する現象が発見できたことは、大きな収穫である。本研究は、平成24年度-26年度科学研究費補助金基盤研究(C)「他動性のプロトタイプ理論と類型論的仮説に関する理論的・実証的研究」課題番号24520426（代表：鄭聖汝）の助成を受けてさらなる進展を目指して引き続き研究を行うこととなった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 12 件)

- ① Yuko Yoshinari, Prashant Pardeshi and Sung-Yeo Chung, Usage of Transitive Verbs in the Depiction of Accidental Events in Japanese and Korean, *Japanese/Korean Linguistics 21*, .査読有、(掲載確定)
- ② Prashant Pardeshi and Yuko Yoshinari, An investigation into the interaction between intentionality and the use of transitive/intransitive expression: A contrastive study of Japanese and Marathi, *Journal of Japanese Linguistics 28*, 査読有、(掲載確定)
- ③ 鄭聖汝, 韓国語における他動性—プロトタイプ理論から見たカテゴリーの内部構造と非規範的構文—, 大阪大学大学院文学研究科紀要 50、大阪大学、査読無、(2010)、91-152
- ④ プラシャント・パルデシ, マラーティー語における他動性のスペクトル、シリーズ言語対照<外から見る日本語>第 4 巻: 自動詞・他動詞の対照、査読無、くろしお出版、(2010)、7-32
- ⑤ 鄭聖汝, 직접사동과 간접사동, 무엇이 문제였나?—새로운 이론적 모형의 제안을 위하여—(直接使役と間接使役、何が問題だったのか—新しい理論的モデルの提案に向けて—、太学社、査読無、(2010)、113-150
- ⑥ 鄭聖汝, 非意図的事象と他動詞構文—「所有」か「責任」か、それとも?—、日本語文法 9-2、くろしお出版、査読有、(2009)、53-69

〔学会発表〕(計 8 件)

- ① 鄭聖汝・黒川尚彦、「今の私がある」と歴史的属性用法、日本語文法学会第 12 回大会、2011. 12. 4、東京外国語大学
- ② Yoshinari Yuko, Pardeshi Prashant and Chung Sung-Yeo, Use of transitive verbs in the depiction of accidental events in Japanese and Korean: A psycho-linguistic study、*Japanese/Korean Linguistics Conference 21*、2011. 10. 20、Seoul University (韓国)
- ③ 鄭聖汝, ナル型言語と他動性—実験調査による日本語・韓国語・マラーティー語の相違を通して—、*Morphology and Lexicon Forum*、2011. 9. 25、大阪大学
- ④ 鄭聖汝・円山拓子、非意志自動詞と「可能」—日本語と韓国語の観点から—、第 2 回中・日・韓・朝言語文化比較研究国際シ

ンポジウム、2011. 8. 23、延辺大学

- ⑤ 鄭聖汝, 「한국어는 D0-language 인가?—실험결과에서 보여지는 일본어, 마라티어와의 차이를 통하여—」(韓国語は D0- language か—実験結果に見られる日本語・マラーティー語との相違を通して—)、社団法人韓国言語学会冬学術大会、2010. 12. 3、韓国外国語大学
- ⑥ パルデシ, プラシャント・吉成祐子・鄭聖汝, 他動性と意図性に関わる言語表現使用の検証: 日本語とマラーティー語の対照研究および日本語教育への応用、*Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ7)*、2011. 3. 5、San-Francisco State University (USA)
- ⑦ 鄭聖汝・吉成祐子, 「非意図性と他動詞文の相関関係—意味的他動性と統語的自他のはざままで—」第 11 回日本語文法学会パネルセッション、2010. 11. 7、就実大学
- ⑧ パルデシ, プラシャント・吉成祐子, 「他動性と意図性の相関関係」第 11 回日本語文法学会パネルセッション、2010. 11. 7、就実大学

〔図書〕(計 3 件)

- ① 鄭聖汝 (代表編)、大阪大学、平成 21 年度-23 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書: アジア諸言語における他動性と非規範的構文に関する記述的・理論的・実証的研究、(2012)、1-185
- ② 西光義弘・プラシャント・パルデシ (編)、くろしお出版、シリーズ言語対照<外から見る日本語>第 4 巻: 自動詞・他動詞の対照、(2010)、1-235
- ③ 鄭聖汝・李廷玟 (編著)、太学社 (韓国)、한국어연구의 새지평 (韓国語研究新地平)、(2010)、1-183

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鄭聖汝 (CHUNG SUNGYEO)
大阪大学・文学研究科・講師
研究者番号: 60362638

(2) 研究分担者

Pardeshi Prashant (PARDESHI PRASHANT)
国立国語研究所・言語対照研究系・教授
研究者番号: 00374984

吉成祐子 (YOSHINARI YUKO)
岐阜大学・留学生センター・准教授
研究者番号: 00503898